

# 初等中等教育におけるポートフォリオを活用したキャリア教育の現状と課題 —実践の継続性・発展性の可視化を目指して—

胡田 裕教\*1・清水 克博\*1・高綱 睦美\*1・鈴木 稔子\*1・角田 寛明\*1・柴田 好章\*2

## 1. 研究背景

「キャリア教育」という用語が日本で初めて登場したのが、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(1999)においてであった。その後、キャリア教育の必要性が提起され、本格的に学校教育で始動し始めて10数年が経過する。その間、学校現場ではキャリア教育における数多くの教育実践が行われてきた。その中で、文部科学省(2011)では、連携の推進という観点から、家庭・保護者との連携、地域・産業界との連携、学校間での連携等を挙げている。中でも、学校間連携においては、学校種間の継続的・発展的な取り組みの重要性が指摘されている。しかし、就労体験学習(インターンシップ)や職業調べ、職業人による講話など様々な実践が初等中等教育で見られるようになったものの、中には、単発的なイベントに終わってしまうケースや、職業観・勤労観の育成に焦点が当てられた同一学校種内での単一的な取り組みが散見され、学校種を超えた継続的な取り組みがあまり行われていないという指摘がある(文部科学省, 2011)。また、学年や学校を超えた継続性がみられても、児童生徒の内省による自己の価値形成を伴った深い学びが存在し、その深い学びを起点にさらなる課題を見つけ新たな活動が展開していないのであれば、発展性の点では課題が残る。

「継続的な取り組み」や「発展的な取り組み」に課題を抱えたキャリア教育の現状を踏まえると、かつて「総合的な学習の時間」が創設された時期に特に小学校での学習成果の評価方法として期待されたポートフォリオ評価の内容を今一度注目する必要性が生じる。学びのつながりに焦点を当てたポートフォリオ評価は授業を通じて学習したものを、記述したものを残し、それらを取捨選択していくことで自己の学びの成長に気づかせ、さらに成長していくというプロセスを得るための評価方法として重要である。これを可能にするために「パーマネント・ポートフォリオ」という考え方がある。西岡(2003)によると、「日常的に二穴ファイルや紙ば

さみに資料をためておく状態をワーキング・ポートフォリオという。ワーキング・ポートフォリオだからといって何でもためていくのではなく、育てたい目標に応じて残すべき作品を考えながらためていくほうが良い。それを編集し直して冊子にしたり、そこから長期的に保存する作品を選び取って別のファイルなどに入れたりした状態をパーマネント・ポートフォリオという」としている。また、教師のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙(OPPシート)の中に授業前・中・後の学習履歴として記録し、その全体を学習者自身に自己評価させる方法である「一枚ポートフォリオ評価(OPPA)」(堀, 2013)という考え方もある。

しかしながら、これらの考え方は一般的に学校現場に定着しているとはいえない。こうした現状を踏まえ、次期学習指導要領における中央教育審議会(2016)においては、「キャリア教育の中核となる教科の明確化の検討」が2011年から議論されてきた結果、特別活動の学級活動やホームルーム活動を、初等中等教育それぞれのキャリア教育の中核として位置づけ、また、特別活動の役割を一層明確にする観点から「キャリア・パスポート(仮称)」の活用を図ることを提言している。つまり、特別活動を要としたキャリア教育の活動において、児童生徒自身の学びの過程を記録するワーキング・ポートフォリオとともに、自己の成長に気づかせ、さらなる成長を目指すための新たな課題設定を得るためのパーマネント・ポートフォリオの機能を果たすポートフォリオを活用することによって、キャリア形成を図ろうとする動きがでていよう。

一方、学校現場を理論的に支える研究動向に目を向けると、「キャリア教育」「ポートフォリオ」というキーワードを手がかりに「キャリア教育研究」(日本キャリア教育学会)等を検索しても関連した論文は管見したところ見当たらず、ポートフォリオを活用することによって、キャリア形成を図る方策は示されていない。

このように、キャリア教育を「継続的・発展的な取り組み」とし、望ましいキャリア形成を図るためのポー

\*1 名古屋大学大学院学生

\*2 名古屋大学大学院教員

トフォリオに関する研究は未だ不十分のままであり、キャリア教育にとって必要なポートフォリオとは何かを明らかにすること、そして、その活用の在り方を検討することは今重要であると言える。

## 2. 研究目的

前述の、研究背景をもとに本研究ではキャリア形成を図るためのポートフォリオに焦点を当て、現在、キャリア教育で用いられているポートフォリオの現状とそこに内在する課題を教育方法学の視座から調査する。その上で、ポートフォリオを活用した授業方法の改善を図るための方向性を提言することを目的とする。具体的な目的としては以下の2つを設定する。

- ①公開された全国の小・中・高等学校におけるキャリア教育に関する実践研究を調査し、ポートフォリオを活用したキャリア教育に関する実践研究の実情を明らかにする。
- ②「継続的・発展的な取り組み」を視点としたキャリア教育を推進するために必要なポートフォリオの視点を検討し、検討した分析視点をを用いて①で明らかになったキャリア教育におけるポートフォリオがどのように意味を持つか、その現状を明らかにする。

なお、本研究において「継続的な取り組み」とは、キャリア教育の一つ一つの取り組みが単発的で断片的にならないよう、時間・学期・学年・学校を超えて連続または接続していることを意味している。また、「発展的な取り組み」とは、児童生徒の内省による自己の価値観形成を伴った深い学びによって、さらなる課題を見つけ新たな活動が展開していくことを意味している。ただし、その全体像を評価することは困難であるため、発展性をとらえる視点としては内省の深さをを用いることにした。認知科学辞典(2002)によると、内省とは、自己の内部に取り入れた物事や情報を自分自身の考え方や、やり方について意図的に吟味する過程を言う。

## 3. 研究方法

研究目的①を達成するため、47都道府県、20政令指定都市、37中核都市の教育委員会、教育センター、教育研究所において公開されている全国の初等中等教育における実践研究を検索し、キャリア教育に関する実践研究論文・報告書を管見する。それらの中からポートフォリオを活用している実践を選定する。

研究目的②については、「継続的・発展的取り組み」を促すポートフォリオに必要な視点を検討し、これを分析の枠組みにして、①で選定した実践研究論文・報

告書で示されたポートフォリオを分析し、現状と課題を明らかにする。つまり、基準を設定した上で、各ポートフォリオの内容や形態についての類型化を図り、可視化することで現状と課題を明らかにする。具体的には、継続的な取り組みについては、単発で終わる実践なのか、数時間かけて行われる実践なのか、学期内に留まる実践なのか、学期を超え学年内に留まる実践なのか、学年を超える実践なのかという一つの校種内での取り組みなのか、あるいは、小学校から中学校への連携、中学校から高等学校への連携、または、小学校から中学校を経て、高等学校につなぐ連携というように校種を超える実践なのかについて検討する。一方、発展的な取り組みについては、内省の程度について検討することにした。つまり、内省が促されていない実践なのか、内省は促されているが浅いものに留まっている実践なのか、または、深い部分にまで内省が促されている実践なのかについて検討する。以上を踏まえ、ポートフォリオの内容・形態について、横軸を「内省の程度」、縦軸を「継続性」にした座標平面を活用することにした。具体的には、座標平面について、内省の程度を示す横軸を「内省なし」、「浅い内省」、「深い内省」の3つのブロックに分け、また、継続性を表す縦軸を「単発」、「数時間」、「学期内」、「学年内(学期を超える)」、「学年を超える」、「校種を超える」の6つのブロックに分ける。つまり、18ブロック(3×6)に細分化された座標上にプロットすることで類型化を図ることにした。

## 4. 研究結果と考察

### 4.1. 調査結果と考察

#### 4.1.1 全国の実践研究の状況とポートフォリオを用いた実践研究

47都道府県、20政令指定都市、37中核都市の教育委員会、教育センター、教育研究所においてキャリア教育に関連する公開されている研究紀要等を管見した。キャリア教育に関する実践研究の論文・報告書は都道府県関係が166件、政令指定都市12件、中核都市12件の計190件を確認することができた。これらのうち、教師用リーフレットや表題のみで実践内容が確認できないものを除くと、実践内容が確認できたものは都道府県が106件、政令指定都市が3件、中核都市9件である。これら118件を管見したところ、ポートフォリオが使用されている研究は、23件であることが確認できた。

図1は、管見したキャリア教育に関する全実践研究論文・報告書の出現傾向とポートフォリオが使用され

ているキャリア教育に関する実践研究論文・報告書の出現傾向をグラフ化したものである。全国の教育委員会並びに教育センターでキャリア教育に関する研究が平成14年度から行われていたことがわかるのに対して、ポートフォリオを用いた研究は平成17年度から行われ始めたことがわかる。また、キャリア教育に関する研究は、全国的には、平成18年度をピークにその後一定程度取り組まれながら、平成25年度を境に平成27年度まで多く取り組まれていることがわかる。これに対してポートフォリオを用いた研究は、平成17年度以降、毎年1,2件に留まり、平成26年度、平成27年度の4件をピークに行われているに過ぎないことがわかる。

このようにポートフォリオを用いたキャリア教育に関する研究は、全国的には十分には取り組まれている状況であることが明らかとなった。そこで、調査で明らかになった23件の実践研究論文・報告書検討し、全国のポートフォリオを活用したキャリア教育の研究内

容を分析すればポートフォリオを活用した現在のキャリア教育の実態を明らかにすることができると考えた。表1は、分析対象としたキャリア教育に関する実践研究論文・報告書の内容を示したものである。

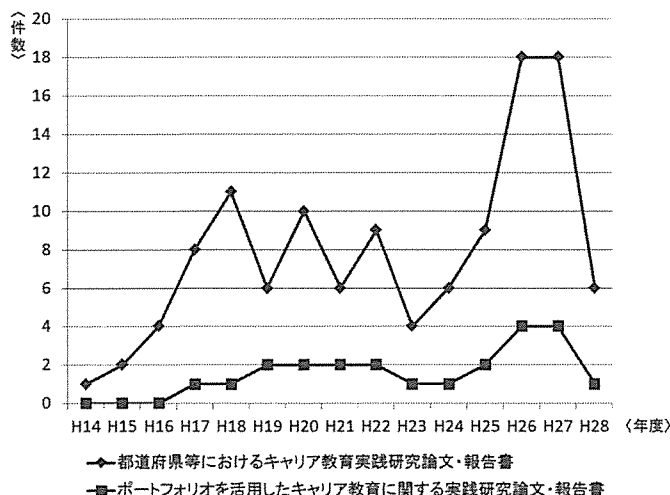


図1. 都道府県等におけるキャリア教育実践研究論文・報告書とポートフォリオを活用したキャリア教育に関する実践研究論文・報告書の出現変容

表1. ポートフォリオを活用したキャリア教育に関する実践研究論文・報告書一覧

No	実践単位	対象校種	研究名	年度	研究概要と特徴	実践記入
1	学校	中学校	中学校学級活動指導案	H17	題材「進路決定」、ポートフォリオとして進路検討カードを活用している。	
2	県	中学校 高等学校	キャリア教育の視点を生かした進路指導の工夫・改善に関する参考資料－生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－【中学校・高等学校編】(平成17年度調査研究事業)	H18	平成18年度から本格的にキャリア教育に取り組むための施策が動き出すことから、県におけるキャリア教育の推進を図ることをねらいとして、現在の中学校及び高等学校における進路指導をキャリア教育の視点でとらえ直し、よりよい実践に向けたプログラムとして再構築するための考え方や具体的な手立てを、事例を紹介しながら解説するように本冊子の内容をまとめたもの。 職業観・勤労観の育成に特化し、勤労体験の自己紹介カードや高等学校のセルフチェックシートがポートフォリオの原型として紹介されている。	▲
3	学校	小学校	キャリア教育に関する参考資料(小学校編)「生きる力」を育むキャリア教育－小学校における理解と実践のためのQ&A－(平成18年度調査研究事業)	H19	県の「教育振興ビジョン(二期計画)」に基づき、キャリア教育推進に関する様々な施策が展開されており、平成19年3月には、「キャリア教育推進の手引き(小学校編)」を発行し、教科・領域全体を通じた実践方法が記述されている。ポートフォリオの活用あり。	▲
4	県	小学校 中学校 高等学校	キャリア教育推進に関する調査研究(最終報告)	H19	今日的課題であるキャリア教育について、その先進的な取組、事例の研究を通して、キャリア教育の在り方と推進のための方策を研究。 ポートフォリオの代わりに「キャリアカルテ」の活用を行っている。	▲
5	県	高等学校	高等学校における系統的なキャリア教育を実践するための指導プランの作成に関する研究－総合的な学習の時間と特別活動を中心として－	H20	「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)[国立教育政策研究所(H14)]」の域を超えていない。 ワークシート(ポートフォリオ化)を作成。内容は将来の職業、学習につなげるものである。	
6	個人	高等学校	高等学校生物におけるキャリア教育の実践－自己理解を深める授業モデルの研究－	H20	生物「遺伝」でのワークショップ型授業実践。授業中にポートフォリオとして、振り返りシートを活用している。	
7	県	中学校	中学校職場体験学習における望ましい勤労観、職業観の育成を目指した指導の工夫－学習プログラムに基づいた「振り返りシート」の活用を通して－	H21	キャリア発達にかかわる諸能力と総合的な学習の時間の探究の過程を関連付けた学習プログラムを作成し、それに基づいた「振り返りシート」を活用した授業実践が行われている。また、ポートフォリオとして基礎・発展シートをそれぞれ4つずつ提案している。	W
8	市	小学校	自己の夢をつくりあげる生き方探究教育のさらなる充実を求めて－人や社会とのつながりを意識した、体験的な学習の実践－	H21	各教科の中の働くこと、生きることにかかわる学習活動を中心に、人や社会とのつながりを意識した体験的な学習を組み込んだ、自己の夢を作り上げる力(自己理解能力、将来設計能力)を育む指導の在り方を提示している。キャリアノート作成についての記載あり。	

No	実践 単位	対象校種	研究名	年度	研究概要と特徴	実践 記入
9	学校	小学校 高等学校	キャリア教育に関する研究 キャリア教育の取組における工夫と 改善	H22	キャリア教育においてポートフォリオの必要性、活用形式を記述。小学校実践事例2に凝縮ポートフォリオの作成手順が記述。ポートフォリオの活用の必要性と活用形式を記述。小学校実践事例2には、授業分析をポートフォリオの活用と共に実践計画に位置付けている。凝縮ポートフォリオについての記述あり。ただし、分析記述はない。高等学校実践事例2には進路カルテとしてポートフォリオを説明している。	
10	市	小学校	生き方探究教育の推進をめざして－ 小学校と中学校をつなぐ、「生き方探 究教育パッケージプログラム」の開発－	H22	「生き方探究教育で育てたい力と各教科等の学習内容との関連表」<小学校版及び中学校版>、中学校へつなぐことができる小学校の「キャリアノート(例)」を提示する。研究概要版のみ。	▲
11	学校	小学校	夢や目標の実現に向けた意欲を育む 小学校におけるキャリア教育の進め 方－体験的な活動を効果的に生か す指導を通して－	H23	「小学校段階においてキャリア教育の視点を意識しながら、体験的な活動を効果的に生かす指導を行うことによって、児童一人ひとりが夢や目標に向かって学び続ける意欲を育むことにつながる」と設定し、小学校での授業実践を通して検証している。 ポートフォリオ使用:学習ポートフォリオファイル(ワークシート、作文、作品のファイル化)	
12	学校	小学校 中学校 高等学校	発達の段階に応じたキャリア教育の 在り方に関する研究－「人間関係形 成・社会形成能力」「キャリアプラン ニング能力」の育成を通して－	H24	基礎的・汎用的能力のうち「人間関係形成能力」「キャリアプランニング能力」を育成することを中心に実践、研究を行っている。ワークシート、自己評価シートを活用している。	
13	学校	高等学校 (特別支 援学校高 等部)	就労支援に向けたアセスメントの活用 に関する研究－キャリアアセスメント を活用した進路相談モデル例の開発－	H25	就労支援に向けて構築されたキャリアアセスメントを進路指導に位置付けて活用するため、進路相談及び進路学習の実施状況を調査し、キャリアアセスメントを活用した進路相談モデル例及び進路相談を効果的に進めるためのワークシートの開発を行う。調査研究協力校の協力を得て進路相談モデル例を試行し、その有効性について検討する。また、ポートフォリオとしての開発したものに、生徒用シートとして、A将来の生活、B作業学習(職業)の取り組み、Cキャリアアセスメントシート、D業務日課シート、E自己理解シート、F作業の振り返り、G就職に必要なこと、Hこれからのこと、があり、教師用シートとして、実態把握シートがある。	△
14	学校	小学校	キャリア教育の充実に向けた教育課程 や指導方法工夫改善ついて研究－ 文脈学習の視点を取り入れた教育活 動で基礎的・汎用的能力を育む－	H25	小学校において、文脈学習を取り入れたキャリア教育を行うことが児童の基礎的・汎用的能力を高めるために効果があることを検討する。そのため、総合的な学習の時間、道徳、国語科の授業に文脈学習の四つの視点(「学習目的とのつながり」「過去の学習や教科間のつながり」「日常生活とのつながり」「将来の役割とのつながり」)を取り入れるとともに、児童につながるを意識させるためのOPPシートを用いて学習活動を展開した。 ポートフォリオ:OPPシート	
15	県	中学校 (小学校 中学校 高等学 校)	よりよい人間関係を主体的に築く 児童生徒の育成－「絆づくり」プログラ ムの開発と活用の提案を通して－	H26	よりよい人間関係を主体的に築く児童生徒を育成するために、小・中・高等学校の学級活動・ホームルーム活動に日常の朝・帰りの会の活動を関連させた指導プログラムとして、「『絆づくり』プログラム」を開発し、その活用を提案している。キャリア教育とは銘打っていないが、人間関係形成能力の育成に視点をあてたキャリア教育とらえることができる。自己評価シートはポートフォリオになりうる。 分析シートは個人の成長を捉えさせる方法として参考になりうるものである。	▲
16	市	中学校	主体的にキャリア形成に取り組むこと ができる子どもの育成(2年次)－中 学校における家庭学習の在り方と、 自学自習できる力を育てるシステム づくり－	H26	「21世紀型能力」の実践力を手掛かりに、ポートフォリオを活用した目標づくりと振り返り活動を提示した。「なりたい自分」を子ども・教師・保護者が共有し、それに近づくために何が必要かを考えることで、「将来を見通した学びを考える力」の育成を目指した。 ポートフォリオとして、アンケート型ポートフォリオ、他者評価型ポートフォリオの2種類を使い、成果を把握している。	
17	個人	小学校	「キャリアプランニング能力」を育む キャリア教育の展開－体験活動と事 前・事後学習に文脈学習の視点を取 り入れて－	H26	「キャリアプランニング能力」を育むキャリア教育の展開について、体験活動と事前・事後学習に文脈学習の視点を取り入れて考察したもの。断片的な活動を有機的に結び付けることを可能にする文脈学習の視点を取り入れ、体験活動と事前・事後学習に学びの意味や価値を実感させる連続性のある学習を行った。具体的には、児童に学習履歴の振り返りをさせながら、自己評価を行うことのできるつながりシートにより、自己の変容を意識化させる取り組みを行った。 ポートフォリオに役立つ発想として、文脈学習・つながりシートを活用している。文脈学習の視点は、学習目的、日常生活、過去の学習・教科間、将来の役割についてそれぞれつながり考える。	
18	県	中学校	キャリア教育の充実に向けた教育課程 や指導方法工夫改善ついて研究－ 職場体験を活用して「基礎的・汎用的 能力」を育てる－	H26	職場体験学習「生徒間の体験の共有化」において、学習に内観の場面を取り入れることで生徒がその後の学校生活で「基礎的・汎用的能力」を高めようとする行動することを目指す。内観ツールとして、自己分析シートを開発、活用している。	▲
19	個人	高等学校	キャリア教育の充実に向けた教育課程 や指導方法工夫改善ついて研究－ キャリアノート活用による有効性につ いての検証－	H27	生徒支援ノート(キャリアノート)を活用することが生徒の自己理解・自己管理能力等の育成に効果を及ぼすかを検討している。キャリアノートの効果的な活用方法の検討。 ポートフォリオ:キャリアノート	

No	実践単位	対象校種	研究名	年度	研究概要と特徴	実践記入
20	学校	小学校	自己の生き方についての考えを深めることができる児童の育成ー「見つめる」「考える」「見つめ直す」過程を取り入れた道徳の時間の工夫を通してー	H27	3つの過程から授業を構想し、学習意識をもたせて道徳的価値を深めさせ、自己の生き方につながることを理解させる。 ワークシートと振り返りカードを利用している。資料あり。	▲
21	学校	中学校	主体的に将来について考えることのできる生徒の育成ー特別活動におけるキャリア教育の授業を通してー	H27	働くことの目的や意義について主体的に考えたり、働くことに関する多様な価値観を理解したりすることのできる生徒を育成する「特別活動におけるキャリア教育の在り方」を明らかにし、具体的な授業プランを提示する。 働く理由ワークシートを活用している。	▲
22	市	小学校 中学校	キャリア教育を通して、自ら考え、判断し、行動できるみやざきっ子の育成ー課題解決学習を通じた基礎的・汎用的能力の向上をめざしてー	H27	「基礎的・汎用能力」を育成するために、キャリア教育の視点に立った効果的な指導方法の在り方を検証する。 SPDCAサイクル:S(動機付け)、小・中の実践。 ポートフォリオ:児童生徒の活動記録のポートフォリオ化(学びの成長、変容過程の可視化の蓄積)。振り返りシートを活用している。	
23	県	小学校 中学校 高等学校	あきたでドリーム	H28	小中学校用に簡易なポートフォリオを作成。	W▲
<p>実践単位 : 県レベルのもの…(県) 市町村レベルのもの…(市) 学校レベルのもの…(学) 個人レベルのもの…(個) と記述</p> <p>実践記入の有無 : 実践記入例があるもの…無印 実践記入例がなくフォームだけのもの…▲ 実践記入例があるものとフォームだけのものが混在したもの…△ ワーキングポートフォリオに引続きパーマネントポートフォリオがある実践… W</p>						

#### 4.1.2 実践研究論文・報告書におけるポートフォリオ

「内省の程度」「継続性」の2つの視点を用いて、23件の実践研究論文・報告で用いられているポートフォリオの分析にあたった。具体的には、ポートフォリオの内容・形態について横軸を「内省の程度」、縦軸を「継続性」とした上で、「内省の程度」を示す横軸を「内省なし」「浅い内省」「深い内省」の3つに分けた。また、縦軸の「継続性」を実践として行った時間数の違いから分析するため「単発」「数時間」「学期内」「学年内(学期を超える)」「学年を超える」「校種を超える」の6つに分けた。そして、この2つの軸を基に、横軸が3列、縦軸6行により構成する18ブロックの細分化された座標を作成した。座標の横軸であるx軸は、「学期内」と「学

年内(学期をまたぐ)」の間に横軸を取ることによって時間経過を大きく2分し、継続性の違いの把握がしやすくなると考え、設定した。縦軸となるy軸は、座標の中央にあたる「浅い内省」の中間位置にすると「浅い内省」が、+と-の2種類が存在するとの誤解を生じさせる危険がある、内省があるものと内省がないものの違いを把握しやすくすることが重要である、との考えから「内省なし」と「浅い内省」の間に縦軸を設定した。

表2は、座標軸を決めるにあたって細分化した「内省の程度」「継続性」の基準である。図2、図3、図4は、表2で示した基準に基づいて分析対象の実践研究論文・報告書を分析した結果を小学校、中学校、高等学校別の座標にプロットした図である。

表2. 座標軸等の基準に関する説明

	内省の程度	意味・視点・考え方	表す言葉
横軸	内省なし	学習の対象・内容のまとめに留まる。	「まとめる」「整理する」など
	浅い内省	感想、気づきにつながる。	「理解する」「気付いた」など
	深い内省	自己の価値観に関する気づき。	「改めて考える」「強く認識する」など
縦軸	継続性		
	単発	使用するシートの特性	
	数時間	系統性に乏しいシート	
	学期内	↑ ↓ 学習の関連性を考慮したシート	
	学年内(学期を超える)		
	学年を超える		
校種を超える			

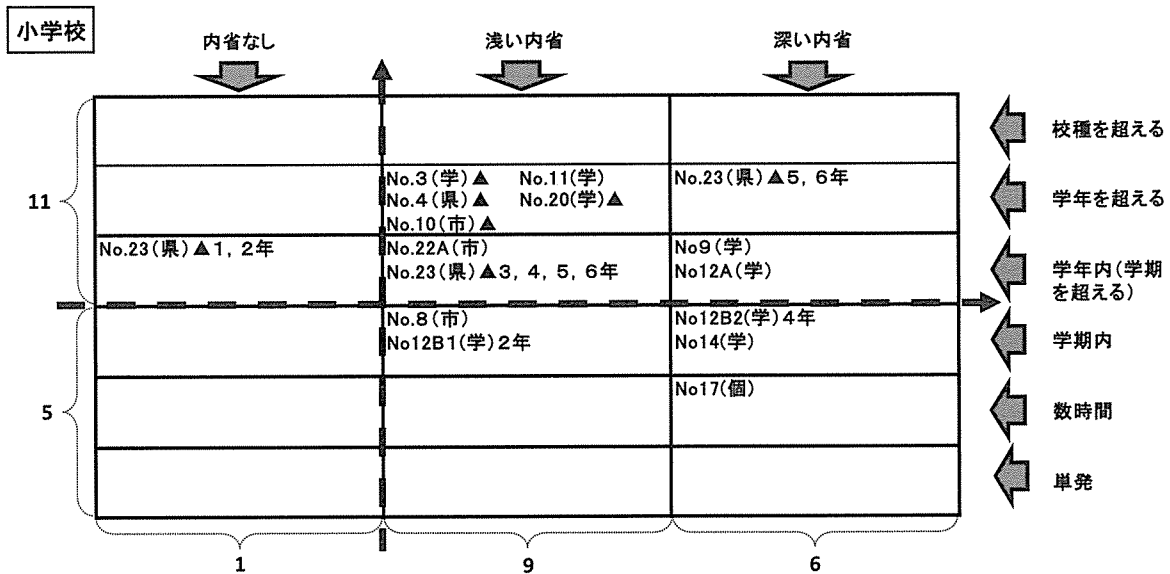


図2. 小学校の18ブロック座標 (16事例)

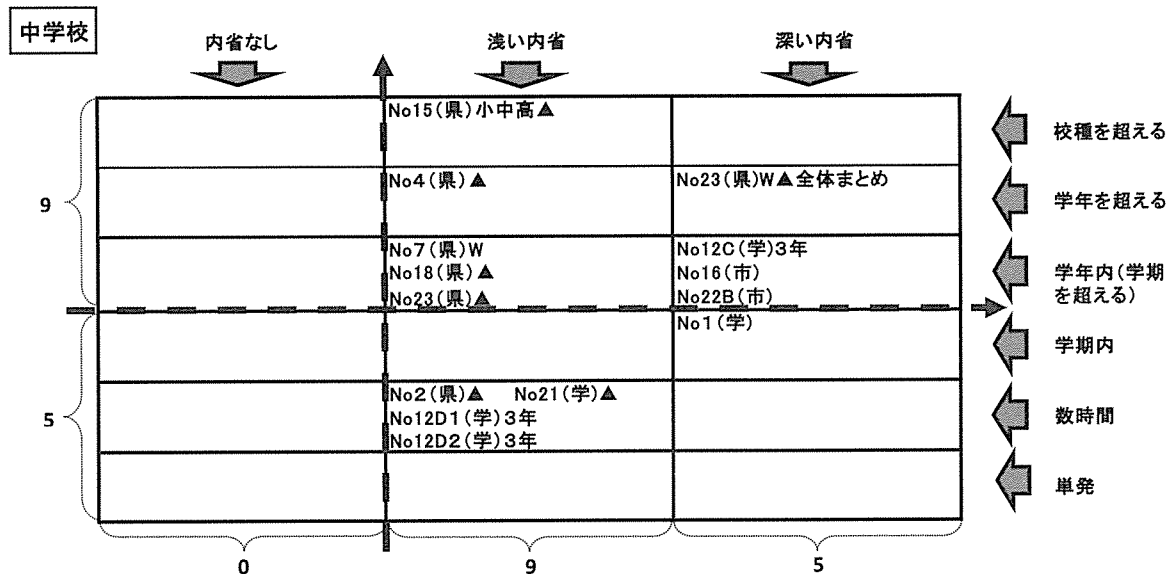


図3. 中学校の18ブロック座標 (14事例)

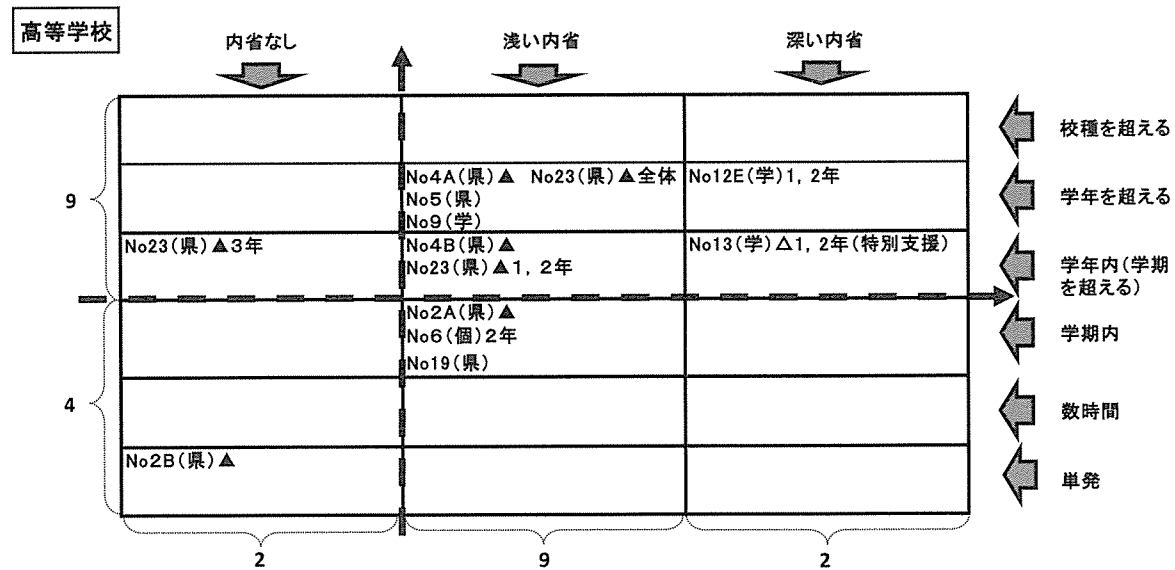


図4. 高等学校の18ブロック座標 (13事例)

※座標軸上にプロットしたNoや(県)(市)▲等は、表1に示した実践研究論文・報告書のNo、記号と一致する。また、同じ論文に複数の実践があった場合、A,B・・・と記載してそれぞれの分析結果を記載した。対象とする学年が実践によって異なっている場合は1年、2年・・・と記載した。

## 4.2. 分析結果と考察

小学校では、図2に見るように継続性においてほとんどが「学期内」以上の時間をかけて実践をしている。また、内省の度合いから見ると小学校1, 2年生を対象としたNo23を除き「深い内省」と「浅い内省」のどちらかを狙っていることがわかる。それらのうち「学期内」といった比較的継続性が短い研究では、具体的なポートフォリオ例が確認できたが「学年を超える」長期的な継続性を持つ研究になると、ポートフォリオのフォームのみが示された実践に留まっていた。「学年を超える」研究において唯一具体的な事例が確認されたNo11の実践を見ると、ワークシート、作品のファイル化といった学習成果をまとめたワーキング・ポートフォリオを用いた実践であり、内省を促すまでの内容には至っていなかった。「学年を超える」長期的な継続性をもった研究では、内省を促すことに関しては実践の方向性を示す内容にとどまり、内省を促すための具体的なポートフォリオの在り方を示すことはできなかつたと推察できる。No9, No12A及びNo12B, No14では、継続性においては「学期内」までにとどまるものの、学習結果をまとめるワーキング・ポートフォリオと、そこからの学びをまとめるパーマネント・ポートフォリオの要素を実践の内容から確認できた。特に、No14の実践ではOPPシートを用いていた。学びのつながりを意識させていたこのシートは、パーマネント・ポートフォリオの機能を果たしており、「深い内省」を促すために用いたポートフォリオであると言える。

中学校では、図3に見るように継続性において「数時間」から「校種を超える」まで学校によって程度にかなりの違いが認められる。内省面では「内省なし」は見当たらず、「浅い内省」から「深い内省」まで程度には差があるものの、生徒に内省を促す実践になっていた。また、「学年を超える」「校種を超える」長期的な継続性を持った研究では、ポートフォリオの具体例は示されておらず、基礎的な内容にとどまっていた。「深い内省」を促す内容であると考

えるNo12C, No16, No22Bを見ると、どの実践も学びの記録化と学びの評価、学びの過程の可視化を促すといった特徴を確認することができた。また、継続性は「学期内」で、1年で実践を完結しようとする内容であった。

高等学校では、図4に見るように「単発」で「内省なし」の研究から、「学年を超える」かつ「深い内省」を促す研究までであるように、継続性、内省の程度はばらつきが見られる。また、小学校、中学校では、「学年を超えた」継続性のある研究はフォームのみを示した実践に留まっているが、高等学校での研究では具体的なポートフォリオが確認でき、高等学校の方が具体的なポートフォリオを準備してキャリア教育が行われていた。高等学校の研究のうち「深い内省」を促したと考えるNo12E, No13は、小・中学校の「深い内省」を促した研究と同じように学びの記録化、学びの評価、学びの過程の可視化が図られている。No13は、特別支援教育という作業を伴う学習で、他の研究と学習形態は異なるが、自己の作業記録（学習記録）、自己理解、作業の振り返り（学習成果の把握）、今後に必要なこと（学習の学びと将来の関連）をまとめたものになっており、ワーキング・ポートフォリオとパーマネント・ポートフォリオの両方の意味を持っていた。今後のキャリア教育におけるポートフォリオの在り方を考える上での参考となる。

図2, 図3, 図4を通じて「深い内省」と判断された13件の研究のうち11件(84.6%)で具体的なポートフォリオが確認できた。「浅い内省」と判断された27件の研究では、半数以上の15件(55.6%)がフォームだけ(▲)を示した実践であった。さらに、「内省なし」と判断された3件の研究は、すべてフォームだけ(▲)の具体性に欠ける実践であった。一方、「深い内省」を促す研究では、具体的なポートフォリオが用意されていたことがわかる。また、「学年を超える」以上の長期にかかわる「継続性」を持つポートフォリオを活用したキャリア教育の研究は、学校を超える組織体制において行われていた。

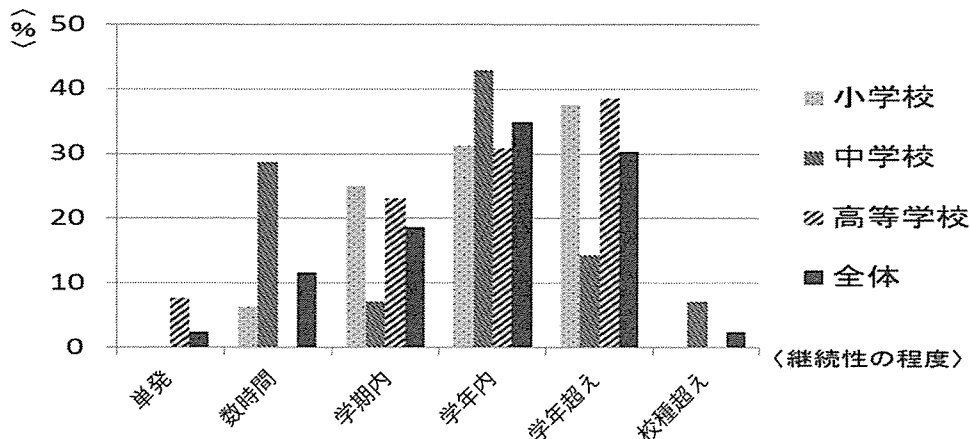


図5. 小・中・高等学校における「継続性の程度」を基にした内訳

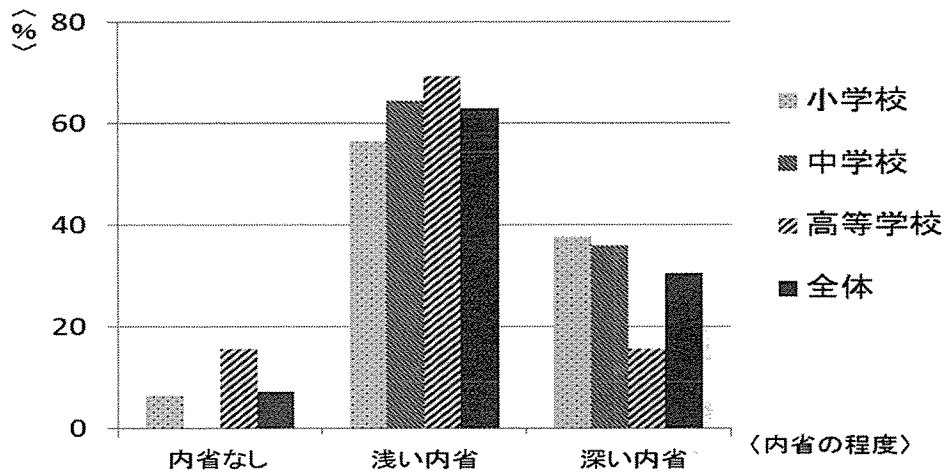


図6. 小・中・高等学校における「内省の程度」を基にした内訳

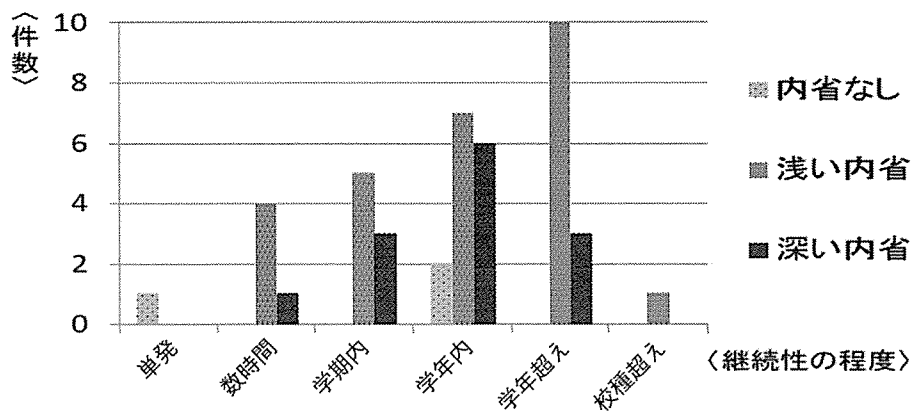


図7. 「内省の程度」と「継続性の程度」の関係

図5は、分析結果を基に小学校、中学校、高等学校、全体の「継続性」の違いについてまとめたグラフである。図を見ると「継続性」では学校種での違いが認められる。小学校の研究は、数時間単位の実践（1件：6.5%）から順に学期内の実践（4件：25.0%）、学期を超えた実践（5件：31.3%）、学年を超えた実践（6件：37.5%）と、継続的にキャリア教育に取り組もうとしている傾向にある。中学校の研究は、数時間単位の実践（4件：28.6%）で終わっている学校が全体の4分の1程度あるが、学年内以上での実践も13件（64.3%）あり、ポートフォリオを活用したキャリア教育の継続性の程度は、2極化の傾向にあると言える。また、小学校、高等学校の研究では確認できなかった学校種を超えて実践を行っている研究も1件（7.1%）あった。このように、中学校の研究は小学校、高等学校に比べて継続性の程度にばらつきが見られており、継続性に対する考え方が地域、学校によって多様であると言える。高等学校の研究は、小学校、中学校に比べて継続性において長期的に実践が行われている傾向にある。全体としては、「学期内」（3校：23.1%）、「学年内」（4校：30.8%）、「学

年を超える」（5校：38.5%）と、時間をかけて実践しようとしている。高等学校の研究は、長期間の継続性を重視してポートフォリオを活用したキャリア教育を推進しようとする傾向にあると言える。継続性については、「学期を超える」以上の継続性を伴った事例の割合は全体の67.4%となり学校種を問わず多く、逆に「数時間」、「単発」の事例は14.0%となり少なかった。

図6は、「内省の程度」の小学校、中学校、高等学校、全体の違いを表したグラフである。「深い内省」を伴っている研究は、小学校16件のうち6件（37.5%）、中学校14件のうち5件（35.7%）に対して、高等学校は13件のうち2件（15.4%）と小・中学校に比べて高等学校は少ない傾向であることがわかる。また、「浅い内省」と判断された研究は小・中学校、高等学校のいずれも9件で、小学校（56.3%）、中学校（64.3%）、高等学校（69.2%）と学校種が上位になるほど割合は増えている。対象とする児童生徒の年齢が高くなるほど「内省」を促すことが重要であると考えて、ポートフォリオを活用したキャリア教育を行っていると言える。また、全体としては、発展性については、「深い内省」



を伴う事例は全体の 30.2%であった。

図7は、全体の結果を発展性である「内省」と継続性の程度をクロス集計した結果である。「校種を超える」「深い内省」を伴う事例は全校種を通じて確認できなかった。ただ、「学期を超える」「深い内省」の事例は全体の 20.9%であった。また、「内省なし」の事例は全体的に少ない。「学年を超える」「深い内省」の事例は存在するものの、唐突感があり、つながりを重視したものとはいえない事例も見受けられた。

## 5. まとめと今後の課題

本研究は、初等中等教育で行われているキャリア教育で用いられているポートフォリオの現状を把握し、可視化した上でそこに内在する課題を分析し、ポートフォリオを活用した授業方法の改善を図るための方向性を提言することを目的とした。具体的には、①公開された全国の小・中・高等学校におけるキャリア教育に関する実践研究を調査し、ポートフォリオを活用したキャリア教育に関する実践研究の実情を明らかにすること。②「継続的・発展的な取り組み」を視点としたキャリア教育を推進するために必要なポートフォリオのあり方を検討し、検討した分析視点を用いて①で明らかになったキャリア教育におけるポートフォリオがどのように意味を持つか、その現状を明らかにすることであった。

研究の結果より、①では、全国で公開されている初等中等教育のキャリア教育に関する論文 118 件の中でポートフォリオを活用しているものは 23 件であり、ポートフォリオを用いたキャリア教育に関する実践研究は十分には取り組まれていない状況であることが明らかとなった。②については、どの校種も一定程度の「内省」を促すポートフォリオを活用したキャリア教育に取り組もうとしているが、長期的な継続性を持つ実践の中では「深い内省」を促す実践はほとんどないことが明らかになった。

これらの背景には、そもそも「ポートフォリオ」という概念が全国の初等中等教育の学校現場に定着していないことが考えられる。学校教育においては、「総合的な学習の時間」が創設される時期をきっかけにして、特に小学校を中心にポートフォリオの活用を積極的に広めていこうとする動きがみられた(田中・西岡, 1999; 高浦, 2000・2002; 西岡, 2003)。それは、選出した 23 件の実践研究においても、小学校が 16 事例(中学校が 14 事例, 高等学校が 13 事例)で一番多いことからある程度みてとれる。しかし、初等中等

教育全体を通して考えるとその広まりは限定されているとみてよい。また、ポートフォリオ自体は認識できていたとしても、それをキャリア教育の中でどのように活用していけばよいかという方法論の欠如の問題や、方法論に関連することでもあるが、実施に際してかなりの時間が割かれるのではないかという教師側の意識の問題などが原因で広まりが制限されている場合も考えられる。ポートフォリオとは、自分の作品や記述した文書をためていくものである。しかも、ポートフォリオをより有効に活用するためには、単にためるだけではなくそれらを見直し取捨選択して必要なものを再構成する。その中で新たな気づき生まれ価値観形成が構築される。この考え方は、社会的・職業的自立に必要な能力、態度を育成してキャリア形成を図ろうとするキャリア教育の目指す方向性と一致する点が多い。したがって、ポートフォリオを活用したキャリア教育については、その重要性を改めて認識する必要があるといえよう。

ポートフォリオを活用したキャリア教育の実践の中で、我々が重要な項目と捉えたものは 2 つある。一つ目は、短い実施期間ではなく、ある一定以上の一連の実施期間を通じて実践が行われることで学習の定着を図ろうとする観点から「継続性」に焦点を当てた。二つ目は「発展性」を取り上げた。これは、本来、時間軸、時系列にも関連することであるが単に時間が経過すれば達成できるというものではなく、発展的なものにつながるものとして「深い内省」を発展と捉えた。一連の学習を通じて現在までの自己と向き合い、内省を促す環境(時間や場所、ワークシート等)を設定し、自分の記述を通して新たな気づきが生成し、時間を置いてそれらを振り返ることで将来に向けた新たな価値観が生まれる。その状態を「深い内省」と位置づけた。これは、前述の、日常の学習履歴を留めるワーキング・ポートフォリオとそれを取捨選択して再構成するパーマナント・ポートフォリオに該当する。一つ目の内省のあと、それらをもとにしてさらに二つ目の内省が促されており、二段階の内省が行われていると考えられ、この一連の過程は「内省の二重構造」ともいえる。

自己と向き合い、内省を促す環境についてさらに述べると、当然のことであるが時間と場所が確保されていることが前提として必要であるうえ、成長を促すためには個人内に留まらない外部との関係が必要である。その全体を教師が効果的にマネジメントしていく。それら一連の過程は重要なことと考える。よって、内省を促す環境設定として、①時間、②場所、③他者、④

教師の仕掛け、の4つの視点で捉えることができる。①については、ここで示す時間とは、期間という時間の広がりを示す意味ではなく、内省を促すに足る時間設定がなされているのかという意味である。例えば、ポートフォリオに記述する時間が実践の中に設定されているのかということである。②では、内省を促す場所について、落ち着いて学習内容を振り返る、あるいは、自分を振り返る場所が設定されているのかということの意味し、③については、教師や級友、あるいは保護者や外部の人も含まれる場合もあるが、自分が作ったポートフォリオについて他者に話しそこで感想や意見、アドバイスをもらうことによって生起する気づきが生じることを意味する。西岡(2003)では、子どもが自分の作ったポートフォリオについて誰かと対話する場面のこととして「ポートフォリオ検討会」を推奨している。④については、特に、ポートフォリオとして使用するワークシートが、そこに子どもの内省を促そうとする教師の気持ちが含まれたシートになっているのかという意味である。つまり、単に、「書く」というだけではなく、つながりや気づき、そして、価値観の変容を促すような仕掛けがあるのかということである。これは、「パーマネント・ポートフォリオ」と、書き留めたポートフォリオを取捨選択し、新たなポートフォリオを作成する段階で、それを一枚にまとめることで一見して今までの自分の学びや気づきが見てとれるようにした「一枚ポートフォリオ評価OPPA」の考え方が参考になる。これらを通じて、長期的な継続性を保ちつつ、深い内省を促す実践が目指されてよい。しかし、ここでも、実践研究論文・報告書だけからは見えてこない部分、つまり、単に子どもに記述させるだけではなく教師の強い気持ちが内在されてはじめて子どもの成長が期待できるという部分は重要な点として挙げておく。

本研究で取り上げた実践研究論文・報告書の実践では、①時間、②場所が、確保されているということは確認できる。しかし、③他者については、その重要性は認めつつも今回の分析でどこまで捉えることができたのか課題が残る。また、④教師の仕掛けに関しては、使用したワークシートからはある程度確認できた。ただ、前述の通り、そこに内在されるが目には見えない教師の熱い思いのようなものをどこまで捉えることができるのかが大きな課題である。

また、それ以外の課題としては、「内省」を考える場合に、我々は「深い内省」というものを提起した。しかし、同じ深い内省であっても、内容により分類でき

るかもしれないとする視点がある。一つは、学校種が異なれば発達段階に応じて内省の内容や程度が異なるのではないかという点である。もう一つは、キャリア形成という観点からは現在に留まるのではなく、将来にむかうという意識が必要になるという点である。つまり、「内省にも、過去を振り返るだけの内省もあれば、将来をより充実したものにする内省もある」(中原・金井, 2009)とする指摘があり、深い内省により次なる課題の生成につながる点が重要だとする点である。これらに関しては、ある程度想定し、判断をしたもののその詳細の区分までできていないことが挙げられる。

以上、初等中等教育におけるポートフォリオを活用したキャリア教育の実践の現状と課題を確認してきた。その中で、明らかにしてきた部分と、課題となる内容が浮き彫りとなった。ただ、現在のキャリア教育の位置づけとしては、特別活動を要とした「キャリア・パスポート(仮称)」の活用実践が提唱されていることから、今回の新たな課題に取り組む場合も、そこにつながるような研究の視点を持ちながら引き続き取り組んでいきたいと考える。

#### [参考・引用文献]

- 愛知県総合教育センター(2007)「キャリア教育推進に関する調査研究(最終報告)」愛知県総合教育センター研究紀要第97集
- 愛知県総合教育センター(2012)「発達の段階に応じたキャリア教育の在り方に関する研究－『人間関係形成・社会形成能力』『キャリアプランニング能力』の育成を通して－」愛知県総合教育センター研究紀要第102集
- 秋田県総合教育センター(2016)「秋田わか杉「キャリアノート」『あきたでドリーム(AKITADE DREAM)』(小・中学校用PDF)」「高校生用キャリアノート(例)」
- 青木政明(2009)「中学校職場体験学習における望ましい勤労観、職業観の育成を目指した指導の工夫－学習プログラムに基づいた『振り返りシート』の活用を通して－」平成21年度長期研修員研究報告書H21長17,群馬県総合教育センター
- 駄場友和・渡部英樹(2014)「キャリア教育の充実に向けた教育課程や指導方法の工夫改善についての研究～職場体験を活用して「基礎的・汎用的能力」を育てる～」研究紀要第1部平成26年度高知県教育公務員長期研修生(研究生・留学生)研究報告, pp.14-25

- 堀 哲夫 (2011)「OPPA の基本的骨子と理論的背景の  
関係に関する研究」『山梨大学教育人間科学部紀要』  
第 13 巻, pp.94-107
- 堀 哲夫 (2013)「一枚ポートフォリオ評価 OPPA」東  
洋館出版社
- 茨城県教育研修センター (2010)「キャリア教育に関  
する研究 キャリア教育の取組における工夫と改善」  
平成 21・22 年度研究報告書第 72 号
- 井本真理・山本圭子・山岡 晶 (2015)「キャリア教育  
の充実に向けた教育課程や指導方法の工夫改善につ  
いての研究—キャリアノート活用による有効性につ  
いての検証—」平成 27 年度研究紀要第 1 部 高知県  
教育公務員長期研修生 (研究生・留学生) 研究報告,  
pp.86-97
- 岩手県立総合教育センター (2008)「高等学校におけ  
る系統的なキャリア教育を実施するための指導プラ  
ンの作成に関する研究—総合的な学習の時間と特別  
活動を中心として—」教育研究第 164 号 平成 20  
年度岩手県立総合教育センター長期研修生 (1 年)  
研究発表資料集
- 木部佳子 (2015)「自己の生き方についての考えを深  
めることができる児童の育成—「見つめる」「考える」  
「見つめ直す」過程を取り入れた道徳の時間の工夫を  
通して—」平成 27 年度前橋市総合教育プラザ研究紀  
要長研道徳 (研究報告書), pp.54-69
- 河野由佳 (2009)「自己の夢をつくりあげる生き方探  
究教育のさらなる充実を求めて—一人や社会とのつな  
がりを意識した, 体験的な学習の実際—」平成 21 年  
度研究紀要 539, 京都市総合教育センター
- 河野由佳 (2010)「生き方探究教育の推進をめざして  
—小学校と中学校をつなぐ, 『生き方探究教育パッ  
ケージプログラム』の開発—」平成 22 年度研究紀要  
資料, 京都市総合教育センター
- 黒原武志・三好 文 (2013)「キャリア教育の充実に向  
けた教育課程や指導方法の工夫改善についての研究  
—文脈学習の視点を取り入れた教育活動で基礎的・  
汎用的能力を育む—」平成 25 年度 研究紀要第 1 部  
平成 25 年度高知県教育公務員長期研修生 (研究生・  
留学生) 研究報告, pp.14-25
- 松下佳代 (2015)「ディープアクティブラーニング」勁  
草書房
- 宮城県総合教育センター (2014)「よりよい人間関係を  
主体的に築く児童生徒の育成—『絆づくり』プログ  
ラムの開発と活用の構築を通して—」平成 26 年度専門  
研究成果一覧 教育相談・生徒指導, 教育相談・生  
徒指導研究グループ
- 宮崎市教育情報研修センター (2015)「キャリア教育  
を通して, 自ら考え, 判断し, 行動できるみやざきっ  
子の育成 —課題解決学習を通じた基礎的・汎用的能  
力の向上をめざして—」平成 27 年度研究員研究紀  
要キャリア教育 キャリア教育研究班
- 文部科学省 (1999) 中央教育審議会答申「初等中等教  
育と高等教育との接続の改善について」
- 文部科学省 (2011)「高等学校キャリア教育の手引き」
- 文部科学省 (2016) 中央教育審議会「次期学習指導要  
領等に向けたこれまでの審議のまとめについて (報  
告)」
- 森本康彦・高橋正行・植野真臣・横山節雄・宮寺庸造  
(2005)「学習活動によるポートフォリオの分類と評  
価支援システムへの適用」『電子情報通信学会技術研  
究報告書』ET2004-99, pp.25-30
- 森本康彦 (2017)「e ポートフォリオと学習評価」  
pp.26-45 森本康彦・永田智子・小川賀代・山川  
修 (編)『教育分野における e ポートフォリオ』ミネ  
ルヴァ書房
- 中原 淳・金井壽宏 (2009)「リフレクティブ・マネジャー」  
光文社
- 日本認知科学会 (編) (2002)「認知科学辞典」共立出版,  
p.105
- 二宮裕之 (2003)「数学教育におけるポートフォリオ学  
習」『愛媛大学教育学部紀要, 第 I 部, 教育科学』第  
49 巻第 2 号, pp.87-98
- 西岡加名恵 (2003)「教科と総合に活かすポートフォ  
リオ評価法」図書文化
- 西岡加名恵・石井英真・田中耕治 (編) (2015)「新し  
い教育評価入門—人を育てる評価のために—」有斐  
閣コンパクト
- 大山紀子 (2014)「『キャリアプランニング能力』を育  
むキャリア教育の展開 —体験活動と事前・事後学習  
に文脈学習の視点を取り入れて—」平成 26 年度教員  
長期研修 (全・後期) 各研修内容, 広島県立教育セ  
ンター
- 埼玉県立総合教育センター (2005)「中 3 特活『進路  
の決定』学習指導案」教育情報コンテンツ
- 佐藤 真 (1997)「ポートフォリオ評価法」『教育方法  
学研究』第 23 巻, pp.79-87
- 鈴木敏恵 (2014)「キャリアストーリーをポートフォリ  
オで実現する」日本看護協会出版社
- 高浦勝義 (2000) オピニオン叢書 62「ポートフォリ  
オ評価法入門」明治図書

- 高浦勝義 (2002) 「問題解決評価ーテスト中心からポートフォリオ活用へー」 明治図書
- 田中耕治・西岡加名恵 (1999) 「総合学習とポートフォリオ評価法 入門編」 日本標準
- 立野了嗣 (2017) 「経験代謝」によるキャリアカウンセリング」 晃洋書房
- 栃木県総合教育センター (2006) 「キャリア教育の視点を生かした進路指導の工夫・改善に関する参考資料ー生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるためにー」 (中学校・高等学校編) キャリア教育の視点を生かした進路指導の工夫・改善に関する参考資料
- 栃木県総合教育センター (2007) 『『生きる力』を育むキャリア教育ー小学校における理解と実践のためのQ & Aー』 キャリア教育に関する参考資料 (小学校編)
- 土持ゲーリー法一 (2017) 「社会で通用する持続可能なアクティブラーニング」 東信堂
- 筒井幸衣 (2015) 「主体的に将来について考えることのできる生徒の育成ー特別活動におけるキャリア教育の授業を通してー」 平成 27 年度宮崎市教職員教育研究論文集, pp.46-58, 宮崎市教育情報研修センター
- 上畑直久 (2014) 「主体的にキャリア形成に取り組むことができる子どもの育成 (2 年次)ー中学校における家庭学習の在り方と, 自学自習できる力を育てるシステムづくりー」 平成 26 年度研究紀要 No572, 京都市総合教育センター
- 柳田雅明 (2005) 「ポートフォリオ利用によるキャリア設計学習の検討ーイギリスにおけるプログレス・ファイルへの移行を手がかりにー」 『カリキュラム研究』 第 14 号, pp.45-58
- 山田恵子 (2011) 「夢や目標の実現に向けた意欲を育む小学校におけるキャリア教育の進め方ー体験的な活動を効果的に生かす指導を通してー」 平成 23 年度長期研修報告書, やまぐち総合教育支援センター
- 山田良寛・由谷るみ子 (2013) 「就労支援に向けたアセスメントの活用に関する研究ーキャリアアセスメントを活用した進路相談モデル例の開発ー」 神奈川県立総合教育センター研究集録 33, pp.1-12
- 山根あさか (2008) 「高校生物におけるキャリア教育の実践ー自己理解を深める授業モデルの研究ー」 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 7, pp.43-48

# The Current Situation and Issues of Using of Portfolios in Career Education in the Elementary and Secondary Education : For the Visualization of Continuity and the Expandability of the Practice

Hiroyuki EBITA   Katsuhiro SHIMIZU   Mutsumi TAKATSUNA  
Toshiko SUZUKI   Hiroaki TSUNODA   Yoshiaki SHIBATA

The purpose of this study is to investigate the current circumstances and issues related to the use of portfolios in career education from the viewpoint of educational methods. Then, a strategy to make good use of portfolios in career education is suggested. An analysis of 23 articles on career education in the elementary and secondary schools in Japan was conducted. For the purpose of investigating the factors which facilitate continuity and expandability of portfolios, the researchers classified the characteristics of 23 cases according to kinds of school (elementary/secondary), forms and contents of the portfolios.

Regarding continuity, of all the cases where portfolios were used, “more than one term” accounted for 67.4%, while “a few periods” and “single period” accounted for 14.0%. As for expandability, which required a student’s reflection on class activities, 30.2% of the cases showed that “deep reflection” accompanied the expandability of the portfolio. However, no case was found where a portfolio with “deep reflection” was used from elementary through secondary school. The cases with “deep reflection” for “more than one term” accounted for 20.9%.